雲龍通信

Vol.2
NPO 法人　雲井龍雄　顕彰会
理事長　屋代久

雲井龍雄顕彰会　会員の皆様

雲龍通信第 2 号をお届けします。新型コロナが収束せず、顕彰会活動も制約が多く十分に出来ない状況ですが、2022 年、いよいよ銅像制作をスタートします。

現在、皆様より頂戴しました銅像建立の募金金額は 430 万円に達しています。目標金額 600 万円までは、まだ金額に開きがありますが、今年はクラウドファンディングやシンポジウム開催などで支援を呼びかけてまいります。会員の皆様にはさらなるご協力をお願いいたします。

① 雲井龍雄銅像建立

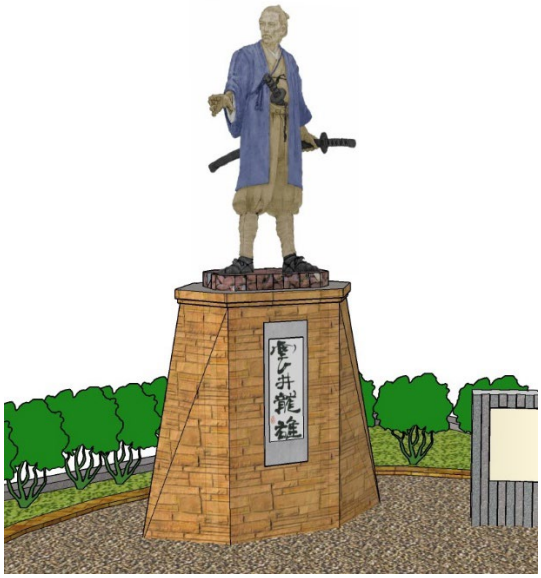
銅像制作に着手します

2022 年　3 月　粘土塑像制作着手
　　7 月　鋳造開始
　　12 月　完成予定
2023 年　3 月　台座整備
　　5 月　銅像設置完成予定

銅像制作者プロフィール

福島大学人間発達文化学類彫刻研究室
新井　浩　教授
（上杉神社・天地人像制作者）

完成予想図



銅像建立募金に協力いただいた会員の皆様の名前を銘板に記載します。

設置場所

雲井龍雄菩提寺、常安寺前駐車場南西角
米沢市城南 5 丁目 1-23

② 最新活動報告

会津在住、郷土史家：笠井尚　先生講演会

ホームページにも載せておりますが講演会を開きました。

当日講演要旨を笠井先生に文字起し頂きましたので掲載します。

③ 2022 年活動予定

クラウドファンディング

2022 年 7 月～8 月を目処にクラウドファンディングを開始します。

詳細はホームページ上に掲載します。身近の方にぜひともお知らせください。

会津と米沢

戊辰戦争時の雲井の行動を会津と米沢からの視点で検証していきます。

関係する人や団体などと、意見交換会やシンポジウム等を企画していきます。

私たちの会は雲井龍雄の銅像建立と、雲井自身と彼の生きた時代を顕彰することを目的に発足しました。シンポジウム・講演会を始め勉強会・他地域との交流会など地道に活動をしてきました。

「歴史は未来のためにある」

遠藤先生の講演の中にこんな言葉がありました。

雲井が何をしたかも必要ですが、彼を通じて何を後世に残せるかがもっと大切です。

雲井は没後、明治の自由民権運動の若者に、昭和の雲井会の重鎮に、そして平成の政治家に影響を与えました。

私たちは次世代の若者を育て、会津と米沢の懸け橋になれるよう活動していきたいと願っています。

また、毎年行っていた戊辰戦争時の会津の使者、「堀粂之助」墓前祭を活動の一部に加えていきたいと思っています。

銅像建立資金確保目標金額達成に、さらなるご協力をお願いします。

銅像建立募金振込用紙同封いたします。本年度の会費納入お願いします。またお知り合いの方で、参加頂ける方がいらっしゃれば、合わせてご紹介ください。

NPO 法人雲井龍雄顕彰会

理事長　屋代久

ホームページ：https://kumoitatsuo.org/　に詳しい情報を掲載してます。

アクセス御覧ください。問い合わせコーナーも設置してますので、ご意見等お寄せください。

余話：雲井龍雄検定　10 問

１．21 歳のとき藩外地域の警備の命を受けますがこの地域の現在の市町村名はなんでしょう。
（ヒント　米沢周辺の町です）

２.そのあと江戸詰めを命じられ龍雄は安井息軒の塾に入りますが、この塾の名はなんでしょう。
（ヒント　幕末に有名な塾で、長州藩士も多く学んでいました）

３.24 歳で戊辰戦争中、越後加茂の陣にて檄を起草しますがこの有名な檄の名はなんでしょう。
（ヒント　倒幕の藩の名を指しています）

４．明治となり 25 歳の龍雄は新政府の行政機関の寄宿生を命じられますこの行政機関とは？
（ヒント　呼び名が同じの立法機関が今もありますが当時は権限もずっと小さな機関でした）

５．26 歳で寄宿生を辞し東京で浪士救済の組織を立ち上げます。この組織の名はなんでしう？
（ヒント　この組織が新政府転覆の組織とされました）

６．そのあと龍雄は米沢に送られまた東京に護送され小塚原で梟首されますが葬られた寺名は
（ヒント　東京には同じ名の寺が 2 つありますそのうち一つは東京明暦大火供養の寺として有名）

７．その後龍雄の遺体は谷中霊園に改葬されその後昭和になり米沢の寺に最終的に葬られます。この寺の名は？
（ヒント　雲井龍雄の銅像設置予定の寺で、龍雄の最終墓があります。米沢の南寺町にあります。）

８．雲井龍雄は米沢袋町の中島家に生まれましたが 18 歳で養子に入ります。この養子先の性は？
（ヒント　この養子先は現在の米沢市舘山口にありました）

９．龍雄は母より母の実家の再興を託されます。この母の実家の性はなんでしょう？
（ヒント　雲井龍雄顕彰会の理事長の家名です。）

１０．藤沢周平は「小説・雲井龍雄」を著していますが、この題名はなんでしょう？
（ヒント　「小説・雲井龍雄」は、1 部雲奔る　2 部討薩ノ檄　3 部檻車墨河を渡るの構成で最初の題名、最終題名ともこの部名から採っています）

答え

1．高畠町・2．三計塾・3．討薩の檄・4．集議院・5．帰順部曲点検所・6．回向院
7．常安寺・8．小島家・9．屋代家・10．雲奔る

―米沢雲井顕彰会講演―

土俗的革命家雲井龍雄

笠井尚

大峠を越えて今日は喜多方からやってきましたが、雲井龍雄についてということですので、二つ返事でお引き受けしました。米沢藩士雲井の存在を知ったのは、僕が高校生の頃でした。その当時は60年安保が終わり、学園紛争が燃え上がっていたころでして、反体制を主張するのが若者の特権であるような雰囲気でした。

維新100年で再評価

僕らがよく読んでいたのは、「現代の眼」という月刊誌で、そこで今は亡き松本健一が「若き日の北一輝を連載し、桶谷秀昭が『土着と情況』で日本浪漫派の保田與重郎などを取り上げ、土俗的・土着的なものへの関心が高まっていた時代でもありました。

時あたかも明治維新から100年にあたり、薩長史観ではないアプローチというのが叫ばれるようになっていました。そんなときに世に出たのが、思想の科学研究会編の『共同研究明治維新』であり、安藤英男の『雲井龍雄詩伝』でした。

『共同研究明治維新』には半沢弘の「宮島誠一郎と雲井竜雄―米沢藩の場合」が収められていました。これを読んで僕は、雲井という土俗的革命家の存在を知ったのでした。僕がびっくりしたのは、雲井の政治的なスタンスが薩長でもなければ、佐幕派でもなかったということです。飫肥(おび)藩士(現宮崎県日南市)の甲村休五との間で「誓詞」を交わしていますが「列藩和解、万民安堵、王政の大綱細目、挙げて尽く遺すの処無く着眼し、鞠躬尽力(きつきゅうじんりょく・体を毬のように縮めて全力を尽くし、それを死ぬまで続けてやまない)するを要す」。三国志で有名な諸葛孔明が述べた言葉ともいわれています。

薩長に牛耳られた京都を離れるにあたって、同志である甲村と血盟の約束を交わしたのでした。

飫肥藩の重臣の座を捨てて、三計塾を開いたのが安井息軒であり、その門弟のなかでも、もっとも期待されて

いたのが雲井であったのです。

マルクス史観薩長史観

雲井は徳川の回復などを考えてはいませんでした。教条的マルクス史観や薩長史観が歴史を捻じ曲げているだけなのです。文久四年八・一八の政変に際しても、雲井の属していた米沢の立場は微妙でした。その前年に京都に展開していた米沢の中老若林作兵衛と、長州の久坂玄瑞との間には尊皇討幕の密約が結ばれていたために、薩摩が長州の武力討伐を主張していたのに対して、米沢は激高する長州を諭すがわに回ったのです。

さらにまた、元治元年の蛤御門の変でも、米沢は退いてゆく長州を追撃しようとした薩摩と会津を牽制したのでした。米沢の１４００の兵は長州を裏切らなかったのです。つまり長州と同じような立場にあったのです。米沢の京都出兵は御親兵として御所を防衛することであり、統率者は公家の三条実美（さねとみ）であったからです。

政治の王道を主張

そうした布石があった上での雲井でしたが、京都に登る以前に江戸の三計塾で学んでいたこともあり、甲村休五にとどまらず、長州の広沢真臣、品川弥次郎、時山直八、土佐の後藤象二郎、佐々木高行、肥後の三浦久太郎らとの交流は深いものがありました。

権謀術策をよしとする薩摩によって、長州も会津も駒として利用されることへの憤りが雲井にはありました。

討幕の密勅が出されたのは慶応三年十月十四日のことでしたが、雄藩の代表者は徴士と呼ばれる職につき下参与に任ぜられ、西郷や大久保らがその地位にありました。雲井は米沢より押されて貢士（こうし）という地位についていましたから、意見を発表する場があったために、実権を握った薩長が形だけ「万機公論」を整えようとしたことに反発をしたのです。

雲井の思いは裏切られたのでした。慶応三年十二月九日に幕府や会津は大政奉還を受け入れたにもかかわらず、その日に偽の密勅によるクーデターが決行され、薩摩の三千の兵が御所にあふれ、西宮には三千の長州の兵が待

機していました。
慶応四年一月三日には鳥羽伏見の戦端が開かれることになり、一万五千の幕府軍は、わずか三、四千の薩長軍に敗れたのです。真に薩長に抗したのは、会津と新選組のわずか千百人に過ぎませんでした。幕府の陸軍は武器では優っていたものの、指揮統率の面で劣っていました。

会津救済に奔走

雲井は三月二十一日　土佐の後藤象二郎と会談しましたが、（奥羽諸藩で謝罪の道を立てるように、自分も尽力すると語っていました）中立的な諸藩を糾合しようとした後藤は、徐々に主導権を失っていきました。薩長連合の立役者であった坂本龍馬にしても、大政奉還後は新政府の首班、関白の地位が用意されていると述べていたにもかかわらず、慶応三年十二月九日、王政復古の二週間前に暗殺されてしまい、後藤象二郎らの土佐にとっては大変な痛手でした。

京を離れ再起を期す

雲井は、閏四月十日に長州の広沢真臣と会談し、会津に対しての処置が寛大になるとの感触を得ます。広沢と後藤の対応は誠意から出たものであっても、江戸開城という事態をはさんで、情勢は刻々と変化していました。桂小五郎（木戸孝允）が上京してくるのは、慶応四年一月二十二日のことで、それ以降木戸と広沢の対立が生ずることになったのです。
安藤英男氏は雲井の脳裏に去来した思いを次のように代弁している。

1、万機公論は名ののみにして、武威を笠（かさ）に着た一党一派の独裁
2、徳川は大政奉還をしており、暖かく之を政府に迎え入れるべき
3、密勅により幕府を怒らせ鳥羽伏見におびき出した
4、孝明天皇の毒殺説を払しょくすることはできない。坂本龍馬、中岡慎太郎らを暗殺したのは討幕派の仕打ちとささやかれている
5、尊皇は薩長だけではない
6、京都守護職をつとめた会津の悲劇は同情に値する

（先帝の宸襟を安んじたものは、会津候に若くものはなかったであろう）

7、薩摩の尊皇攘夷は口だけであり、政敵を駆逐する方便でしかなかった。

8、薩長が錦旗をひそかに製造していたのは、朝廷をないがしろにした行為である

もやは雲井の居場所は京にはなく、奥州を束ねて薩長の台頭をくじくために、客舎の壁にしたためたのが次の詩でした。

客舎の壁に題す

斯（こ）の志成さんと欲して　豈（あに）　躬（み）を思はんや
骨を埋（うづ）む　青山　碧海（へきかい）の中
酔ふて　宝刀を撫して　還た冷笑し
決然　馬を躍（おど）らして　関東に向ふ

雲井の行動は命を狙われるまでになっており、京都から江戸に同行したのは肥後の平井襄之助でした。元治元年の禁門の変前に佐久間象山を斬った、河上彦斎（げんさい）の一党であり、雲井と同じように薩長に与することを潔しとはしなかったのです。

五月十八日に江戸に着くと、上野戦争は二、三日前に終わっていましたが、奥羽越列藩同盟の報に接し、気を取りもどしたのでした。それから十日間ほど江戸に潜伏。三計塾の師である安井息軒とも連絡をとりました。

それから榎本武揚の長鯨艦で常陸の平潟に上陸し、会津や米沢の間を行き来し、その間を縫ってわざわざ北越戦線に出かけ、米沢の総督色部長門を動かし、「討薩の檄」を起草し、見付けにおいて、会津の佐川官兵衛、長岡の河井継之助の賛同を得たのです。

沼田で騙し討ちに遭う

雲井は慶応四年（明治元年）八月十四日、上毛鎮撫のために旧幕臣羽倉鋼三郎、前橋藩士屋代由平、日光山僧侶櫻正坊隆邦、会津藩士原直鉄らとともに、片品村字須賀川に入りましたが、八月十八日には前橋や小幡の騙し討

ちに遭いました。

須賀川にとどまった羽倉、屋代、櫻坊は殺害され、雲井と原ら四人は西軍の軍監姉川栄三と直談判をするために追貝に向かう途中、辰沢で伏兵（前橋、小幡、沼田）に銃撃され、雲井と原は山中に逃げ込み、かろうじて難を逃れました。雲井が檜枝岐に向かう途中、三平峠を下った尾瀬沼で詠んだのが次の詩です。

「述懐」

生きては　生を聊（やす）んぜず　死しては死せず
呻吟（しんぎん）　聲裡（せいり）　仆（たふ）れて又起つ
馬を湖山に立つる
雄飛　壮圖（そうと）　長（とこしな）えに已む
我が生　涯（かぎ）り有り　愁い　涯り（かぎり）無し
悠々（いういう）たる前途　果して如何（いかん）
咄々（とつとつ）説くを休（や）めよ　斷臆（だんおく）の事
満山の風雨　波　花を生（しゃう）ず

雲井が若松城下に取って返すと事態は急変し、米沢は降伏し、会津も城下の盟を受け入れるしかありませんでした。

雲井は明治二年に「集議院」に到仕しましたが、戊辰戦争で浪々する敗残の士に手を差し伸べるために、東京芝二本榎（にほんえのき）の上行寺、円真寺を借り受け、「帰順部曲点検所」の看板を掲げ、明治政府の常備軍に加えてもらう運動に邁進したのでした。

しかし、それもはかない夢でした。広沢は自らに危険がせまっていることを察知して、雲井を遠ざけたのです。そして、同志の江秋水から雲井に宛てた手紙の「逐々（ありて）諸君御地へ出掛け候事故、委細御承引と存じ候」との文章がきっかけとなり、次々と同志が捕縛され、雲井も米沢から東京に移され、八月十四日に米沢藩邸に到着し、翌日には小伝馬町の獄舎の人となったのです。判決を受けたのは明治三年十二月二十六日のことであり、刑の執行はその二日後でした。

雲井事件の真相とは

半沢は「この書類は、雲井事件の類縁者たる一司法官が、後年法院の倉庫よりさがし出したもので、今も現存しているが、その文面はよほどの拡大解釈をほどこさぬ限り『反乱計画』の事実を指摘するには困難なしろものなのである」と断じています。

藩閥政府への反感を募らせていた雲井は、内部からの変革を模索していたのであり、その前段階としての戦術であったのです。いうまでもなく、雲井には協力者がおり、それらと歩調を合わせた行動でもあったのです。雲井処刑の日から間もない明治四年一月八日に、一時は雲井の協力者であった広沢は何者かに暗殺されたのでした。

半沢弘は「宮島誠一郎と雲井竜雄」において「私はさきに雲井処刑と広沢暗殺の関連性を述べ、その背後に木戸ありとの推量をしたが、その推量を可能ならしめたものの一つは『広沢暗殺事件』の直後に坂田潔が（高鍋藩士・前原に心酔、萩の乱の前に西郷に会っている）が長州・萩に退いている前原に宛てた手紙」に触れ、前原が広沢暗殺の勅然たる前年十月に東京を引き払ったことの洞察力に深く脱帽したのでした。

事を起こしたわけでもないのに、雲井は晒し首となってしまいましたが、雲井の絶命詩は、今も私たちの心を揺さぶらずにはおきません。

「述懐」

死して　死を畏（おそ）れず
生きて　生を偸（ぬす）まず
男児の　大節
光　日と争う
鼎烹（ていほう）を　憚（はばか）らず
渺然（びょうぜん）たる　一身
萬里の　長城